

母親のメタ認知促進による母娘関係の改善

— カウンセラーとの会話の語用論的ビデオ分析の効果 —

地域社会環境学専攻

窪田庸子

Improvement of Mother-Daughter Relationship by Promoting Metacognition of Communication in the Mother : The Efficacy of Using Pragmatic Videotape Analysis of Her Conversation with a Counselor

Yoko KUBOTA

ABSTRACT

This is a case presentation of counseling for a mother, whose daughter was with school refusal, using pragmatic videotape analysis of her conversation with a counselor. The analysis helped her reflect on her communication, and she began to feel that she did not listen to her daughter during the analysis session. A week later, she reported that she started to experience watching herself objectively during conversation with her daughter. This case suggested the efficacy of pragmatic videotape analysis on promoting her metacognition of communication and on improving her relationship with her daughter.

KEY WORDS

Videotape analysis, Metacognition, Counseling

はじめに

近年、ビデオの普及は著しい。中島（1996）は認知心理学の視点から、ビデオをはじめとした映像を学習場面で併用することで学習が促進される効果があることが確かめられていると述べている。分析の際にビデオ分析を用いることは、実際に教育界（石田，1998；三宮，1995）や保育界（瀧川・加納・多井・石垣，1999；富田・田上，1999），スポーツ界（木原・綿引・坂本，2001）などの様々な分野で行われている。心理臨床の分野では，1940年に Rogers（1961）が，当時としては珍しかったテープ記録を用いて面接を録音するというパイオニア的研究を行ったのを皮切りに，次々とビデオを用いた研究が行われた。クライアントと

カウンセラーの相互作用のビデオ分析から，「マイクロカウンセリング」とよばれるカウンセリング学習のためのメタモデリングの理論と技法が Ivey（1971）によって開発されたことをはじめとして，ビデオ分析は，従来から専門家の養成や訓練法として用いられてきた。専門家以外を対象とした例では，村山（1981）が，エンカウンターグループの参加者に対して，グループ体験の意識化と未消化部分の消化をはかる目的でビデオフィードバックを用いたプロセスフィードバック法を開発し，その効果を報告している。また，富田・田上（1999）は，幼稚園教員にビデオ自己評価法を行い，その援助スキルに変容がみられたことから，客観的に自分の姿を見直せるというビデオの特徴が自己学習の促進に役立っているとして，ビデオ

自己評価法を教員研修やカウンセラー養成時のロールプレイング研修に応用することを提案している。しかし、相談活動自体の中でビデオ分析をクライアントとともにに行った事例は、これまでほとんど報告されていない。学習と心理療法について、小口（1988）は、“学習は、進む方向については、(1)望ましい方向へ進む場合、(2)歪んだ方向へ進む場合の2つになり、歪んだ方向へ進んだ場合、その歪んだ方向へ進むことを止めて、その歪んだ状態の歪みを除去するか、軽減するか、治療が求められるが、そのためには、可能な方法で望ましい方向への学習が必要になる”と述べている。このような観点からみて、ビデオ分析は、クライアントが自らの状況を見直し、新たな学習をするために有効な意義をもつのではないかと推測される。心理臨床と領域は多少異なるが、坂越・竹田・田中（1987）、柗蔵（1992）は、次節で詳細を紹介する「インリアル」に基づいたビデオ分析を行うことにより、幼稚園や養護学校で子どもにかかわる大人の、コミュニケーションの感度（sensitivity）が高まる効果が得られたことを報告している。また、大井（1999）によると、特殊教育の教員を対象としてビデオ分析を用いた結果、“子どもとの会話の不全の語用論的分析に基づき、それを修復する方向へ大人の伝達行動を操作すると、会話が修復され、伝達機能が向上するだけでなく、対人関係の改善、学習の促進もはかられた”という。また、アメリカでは、思春期の子どもをもつ父親たちによるインリアル講座が成果をあげているという報告（INREAL program Overview, 1978 - 1998）が得られている。そこで、本研究では、子どもの不登校の問題で相談に訪れた母親との面接に、インリアルで行われている方法に基づく語用論的ビデオ分析を導入した1事例を報告し、その導入が相談活動において効果をもたらした要因について検討したい。

I 対象と方法

1. インリアルとビデオ分析

インリアル（Inter Reactive Learning and Communication）は、1974年にアメリカ、コロラド大学の Weiss 博士と Heublein 博士によって、言語発達遅滞児の障害予防プログラムとして開発された。「INREAL 研究 創刊号（1987）」によると、“基礎となる言語発達観は、事象とことばとの関係を扱う意味論と、言語獲得は社会的行為であるとして、人とことばとの関係を扱う語用論である。特に、語用論的観点にたって、インリアルは「良きコミュニケーションの構築」を目指す、そのコミュニケーションをノンバーバル行動、ことばの周辺要素（抑揚、声の大小等）、会話規則等を含めて捉える。そして、大人が非言語行動レベルから子どものサインを感度良く読み取って（reactive）子どものコミュニケーション能力を育成する。そのために、大人のコミュニケーションにおける感度（sensitivity）をレベルアップすることも目指している。子どもの評価や指導の基本となる発達観はピアジェ理論であり、自然遊びの場面からの情報を重視する”と述べられている。インリアルは、実際的方法としてビデオ分析というトレーニング法を持っている。ビデオ分析の際には語用論的観点から、子どもと大人のやりとりにおける両者の伝達意図と効果を重要な分析項目としている。それは、語用論では、Austin（1962）や Searle（1963）のいうように、人に向かって発せられたことば「発話行為」は、発する人の意図「発話内行為」すなわち「意図行為」を表すものであり、発話者が相手に何を伝えたいか、そしてまた、それが聞き手にとってどのように解釈されるかといった、その「発話行為」が最終的に生み出すもの、すなわち「発話媒介行為」が重要であると考えられているからである。

2. 心理臨床とビデオ分析

たとえば、同じことばであっても、「馬鹿だね」と怒鳴りながら言うのと笑いながら言うのでは、

あるいは、目をそらして言うのと見つめて言うのとでは、伝達されるものが全く異なっている。ビデオには映像情報が音声情報とともに記録されているので、心理臨床においてビデオ分析を用いることにより、「どのような内容のことばをかけたか（What to speak）」に加えて、「どのような方法で伝えたか（How to speak）」をも同時に検討することが可能になる。Bateson（1951）によれば、コミュニケーションには「報告」と「命令」の2つの側面があるという。情報の報告と、それがどのように受け取られるかの命令、つまり情報に関する情報の伝達である。Watzlawick, Bavelas, & Jackson（1967）は、前者はコミュニケーションの「内容」の側面と、後者は「関係」の側面と同義であると説明する。そして、後者は、コミュニケーションに関するコミュニケーション、いかえればメタ・コミュニケーションであり、たとえば、「これは命令だ」「私は冗談をいっているだけだ」などはそれが言語的に表現された例であるが、多くの場合は、冒頭の例のように非言語的に表現されたり、あるいは、コミュニケーションが生起する文脈から理解されたりしているという。したがって、意識的に「関係」の意味が明確化されていることはほとんどないといえてよい。であるから、Watzlawickらによると、“実際、自発的で「健康的な」関係になればなるほど、コミュニケーションの関係の側面は後ろに退く。反対に、「病的な」関係はその関係の性質に恒常的に取り組むことによって特性化され、そこではコミュニケーションの内容的な側面はどんどん重要性を失って行く“という。この「関係」の側面は、先に述べたように意識化されることが少ないため、そのままの状態では関係そのものを対象化し変化させることは困難である。佐藤（1989）は、“コミュニケーションが成立するとは、ことばの意味、すなわち気持ちや思いが、声に出して話されることで自分と相手にとって明確化されること、すなわち象徴的相互行為（symbolic interaction）が成立することを指す。しかし二者関係において当事者は、その関係に埋没しており、自分の立場を主張、

防衛することに忙しい。相手との関係における自己と、関係そのものを対象化することは難しいわけである。そこで二者関係を外側から見る第三の目が必要となる”と述べている。また、松村（1960）は、人間関係の発展には次のような“三者関係的”なあり方が有効であると述べている。松村は、人間関係をその関係が発展していく際の関係自体を主体として類型的に把握し、“人間関係を自己関係的に把握する一者関係型、他者関係的に把握する二者関係型、『間』関係的に把握する三者関係型”に分類しているが、“三者関係型における個人の行動のしかたの特徴は、他者に反映したものが更にもう一人の他者からどのような評価や反作用を受けるかをも意識しながら、三者の関係を把握して行われるところにある”という。そして、このようなあり方によって、“関係の中に属しながらも、しかも関係の動きから一步はなれてこれを眺め関係を操作することが可能になってくる”と述べている。本研究で導入したビデオ分析は、ビデオに録画された自己と他者との関係を、時間をおいて、自己がそれを対象化して検討する作業である。そのため、ビデオを見る時の自己は、ビデオに映っている自己を三者的に客観的にみることが可能になるであろう。そして更に、ビデオ分析は、クライアントが自己と他者を対象化することで自己と他者の関係をも客観的に見ることができることによって、関係そのものに働きかけ関係を変化させる道を開かせるのではないかと筆者は考えた。

3. 事例の概要

クライアント：Aさん。40代後半の女性。主婦。

主訴：「思春期の非行の娘に対してどのように関わればよいのか。『子どもを受け止めてあげるように』とか『見守ってあげるように』と他人はいうが、具体的にはどうすればいいのか自分にはわからない。わかるようになりたい。」

家族構成：夫と息子2人、娘1人の5人家族。

夫：40代後半。会社員。子どもに対してことばで説得するよりもすぐに手が出る人であるという。

長男：20歳。建設業。3歳の時に病気をして難聴になり、幼稚園時代は治療教室に通っていた。中学3年生の時から不登校が始まり、不良グループとつきあうようになった。現在は、「いつまでもこんなことをしてられない。まっとうな道に入る」と言って働き始め、張り切っているという。次男：16歳。高校3年生。小さい頃は、母親が長男の世話にかかりきりだったので、母親の実家の祖父母によって育てられた。おっとりした穏やかな性格。妹のよい相談相手になっているという。長女：14歳。中学3年生。小さい頃から手のかからない、成績のよい、「我が家の自慢の子ども」だった。母親の手をわずらわせないようにと、幼稚園児の頃から、自分一人で風呂に入り洗髪まですませてくるような子どもだった。ところが、中学1年生の頃から、「先生なんて、言っていることとやっていることが違っている」と言い始め、中学2年生の時に、学校に煙草を持っていったり、化粧品を持っていったりして、相談室に呼び出された。今年の1月に父親から「部屋が煙草臭い」と叱られたことをきっかけに数日間家出をした。それ以来、不登校が始まった。しかし、母親の言うには、「学校自体は嫌いではないらしく、ちょこちょこ学校に行っている」状態である。小学5年生の時から、平気で一人で電車に乗って隣の県へ出かけ、「今日はハンバーグを食べてきた」と母親に言ってくるようなアクティブな子どもだったという。

Ⅱ 経 過

#1 X年6月第1週 インテーク

Aから主訴や家族構成、問題の経過などをきく。当時、筆者は、臨床心理士としてのコミュニケーション・センシティブリティを高める目的でインリアルを学んでいたが、娘とよりよいコミュニケーションをもちたい、そのための具体的な関わり方を学びたいというAの要求が、その目指すところと合致しており、問題の解決に効果をもたらすのではないかと考えられたので、Aにその旨を説明

して、ビデオ分析をしてみることを提案し、同意を得た。

#2 X年6月第2週 ビデオ分析

筆者とAが、相談室に設定したビデオカメラの前でロールプレイングを行ない、その様子を撮影した。母親役と子ども役を交代で演じた。その後、各役割を演じてみての感想を述べ合った。次に、ビデオを再生して各自トランスクリプト（逐語録）を作成し、作成後、インリアルビデオテープ分析について経験を積んでいる筆者の指導者にスーパーバイザーとして参加してもらい、3人で第1回目のビデオ録画についての分析を行った。はじめに、分析を行なう際の留意点について、スーパーバイザーから、「ビデオを撮影した後、その録画をもとに次のことを中心に一緒に検討してみます。①話題について、どちらが話したかった話題かをはっきりさせる。②待ち時間について、相手に話す時間をあげるための時間は十分であったか。③どんなつもりで話し、それが相手にどう理解されているか。④うまくいっていない場合には、どうしてうまくいかないのだろうかを考えてみる。たとえば、自分が相手に何を伝えたかったかについてよくわからないままに話していた、などということです。これらをビデオの流れを追いかけてながら話し合います。正解を探すのではなく、何が起きたか、どんな気持ちだったかを、たんと、できるだけ、さしつかえない範囲ではっきりさせましょう」という説明を受けた。

第1回目と第2回目のビデオのトランスクリプトを、表1、2に示した。

ロールプレイング後、Aは、「娘役からダイレクトに『淋しい』と言われて、ギクッとした。」「構えずに、親の揺れている気持ちもそのまま伝えればいいんだなと気づいた。」「子どもに言い負かされたように感じてしまっていて、『頑張らなくちゃ』と思って喋っている自分がある。討論しているわけでも何でもないのにね」と感想を述べていた。

ビデオ分析は次のように行われた。スーパーバイザーをS、筆者をTと表すこととする。Sが「母親の①はどっちの話題か？ 別の伝わり方を

表1 ビデオ第1回目のトランスクリプト

子ども役 (A)	母親役 (筆者)
① お母さん、ピッチ（携帯電話）いつ返してくれるが？	① 元気ないね。どうしたの？
② うん。（と言いながらじっと相手を見ている）	② うーん。（下を見る）。この前からその話をしてるね。（間）
③ （口をとがらせて）ふーん。Bさんなんて返して貰ったんよ。煙草吸わんていう条件つきなんやって。家で煙草吸わんからピッチ返してもらったんや。私も返して。	③ お父さんとも考えてるんだけど、ちょっと迷ってるんだわ。
④ （母親の④にかぶせるように）今度からちゃんとか…	④ だけど、あなた、ピッチ使うと電話代がすごくなるし…
⑤ 今度からちゃんと1万円で。料金制限で1万円というのがあるし。1万円きたら切れるという装置があるし。もう1万円で切るし。	⑤ この前もそう言った。
⑥ この前もそうやったつもりだったんだけど、プツと言わなかったみたい。切れると思っていただけ。	⑥ 何か信号が出るって？
⑦ お小遣いも要らんし。そのお金で払うし	⑦ （沈黙）
⑧ 絶対自分からはかけんし。来るだけだし。	⑧ （沈黙）
⑨ そんなん、無視すればいいし。嫌だったら出んとかばいいんやし。	⑨ 来るだけって言っても、お母さんの知らない、付き合ってほしくない人からも来るし。
⑩ なら、返して!!	⑩ （沈黙）あんたのこと、信じとらんわけじゃないけど。うん、あの信じとるけど…

しているのではないかと。そこから受ける印象は？」と尋ねると、Aは『『母親が何か言っている。ただの挨拶とか社交辞令だ』と受け取った。うちでは親子関係がうまくいっていないから、親子ともに相手の言いたいことを聞こうとする気がない。だからここでもとにかく、『ピッチ（携帯電話のこと）返して』と、自分の要求を単刀直入に言った』と答え、Tは「私は、娘が『私の話にのって

頂戴』と言ってきたように受け取った』と答えた。それに対し、Aは「この時の私の気持ちは、むしろ、『いらいらしてるのよ』という方が強い」と言う。SがTに、「相手がそんな気持ちもあったということを受け止めていましたか？ 相手の気分を受け止めたわけでは・・・ない」と確かめると、Tは「はい、ないです」と答えた。次に、Sの「子どもの②のところでAが相手をじっと見てい

表2 ビデオ第2回目のトランスクリプト

子ども役 (筆者)	母親役 (A)
① お母さん、そろそろピッチ返してよ。	① お母さん、すごく考えているんだけども、どうしてもあなた、やっぱ、ブレーキかからなくて、1ヶ月3、4万というお金が来てしまったら、そんな大金支払うのは無理だから、もう少し…
② でも、ないと淋しいもん。	② うーん、そうねえ、それもわかるけど。だから、じゃあ、うちにないわけじゃないから。家の電話使ってもいいし。かける分には。もう少しピッチ我慢しようよ。
③ だって、ここんとこひと月くらい無いけど、やっとなんわ。だって他にすることないもん。	③ でも、本読むとか、音楽聴くとか。
④ それは、友達でないもの。	④ でも友達だったら、学校へ行ったら会えるんだし。8時9時10時まで、それ以降もかかってくるから。それで十分でないか？それ以上のことやってる人って、たとえば100人いたら、50人…
⑤ でも、みんな…。50人、持ってるわけだし。	⑤ だけど、よそのうちはよそのうち。うちはそれだけのお金、払えないから。
⑥ 人は人。私はほしいもん。それなら、バイトするわ。友達やっとなるよ。Bちゃん、そう言ってたし。	⑥ でも、中学生を雇ってくれるか？高校生にならないと…
⑦ ねえ、返してよ。	⑦ じゃ、ちゃんと前みたいに8時半とか9時までに帰れるか？それが頑張ってきて、そして1万を絶対に超えないというのが約束できたら返してあげる。でも、あなたの方は際限なくお金を使うから。そこでブレーキをかけて、この、うーん。

るということは、『母親が私に何か話があるらしい』と感じていたらしいけれど、何故見ていたの？』という質問に対して、Aは『『お母さんはどんな気持ちかな？』と思って』と答え、Sが「それに

対して、母親②の『うーん』だけじゃ、わからないですよ』と言うと、Aは「ええ。この時、私は相手の反応を見て、『ほんとに考えているのかな。どれだけ考えているのかな』と見ていた」と

答えた。Sの「待ち時間は、ちゃんとありますね。母親②の『うん』は、どんな気持ちでいるの?」という質問に、Tは「何か言わなければならないけれども、どう言えばいいのかわからなくて、とにかく間をつなぐために声を発した」と答え、Sの「母親②の『この前から・・・』については、Aはどう受け止めたの?」という質問に、Aは「覚えていてくれている、伝わっていると思った」と答えた。さらにSが「では、Tの『どんな気持ちか知りたい』という気持ちについては、伝わっていますか?」と尋ねると、Aは「はい。私の考えを求められているらしいと受け取ったので、『じゃあ言いますけれど』と喋り始めた」と答え、Sが「それはさっきみたいに外れていなくて? 『この前から・・・』ということばで『じゃあ一緒に話しましょう。そのことについて』とTが思っているのがAに伝わりましたか?」と尋ねると、Aは「はい。そこで私は『うん』と言っているから、伝わったのだと思う」と答えた。ここで、Sが「しかし、ここで、Tの言おうとしたところと、Aの受け止めたものとは微妙にずれていますね」と指摘すると、Tは「はい。この時の私の気持ちは、『相手である娘がその話をしたいと思っているから、私もします』です」と答え、Aは「私の方は、『そうや、私を待たしておったんや、あんたは。やっとわかったのね』です」と答えた。ビデオ分析終了後、Aは、「表情とか、声の調子とか、間にはすごく『思い』が出ているんやね」「全然その気でないことを、相手がそういうように受け止めることもあるんや・・・」と、感心したように感想を述べていた。

＃3 X年6月第3週 ビデオ分析後の変化

「先日ビデオ分析をしたことで、気持ちを考えるゆとりが出てきた」とAは語り始めた。「日常生活場面の中でも、『あのビデオでとっていれば、この状態はこんなふう』と見ているもう一人の自分がいて、余裕が出てきた。『自分の言いたいことは、この人（見ているもう一人の自分）が知っているから』と、どこか安心している。いつものペースだと、娘に『じゃ、やめまっし』と、売り

言葉に買い言葉的に、よく考えもせずに言っていたのが、今回は『言ってきたな』と受け止めて、自分の伝えたいことを伝えるようになった。たとえば、昨日の母娘の会話は次のようだった」と言いながら、Aは以下のように娘とのやりとりを再現してみせた。「最近、学校では進路指導調査票を提出しなければならない時期になってきている。娘は心理的に追い詰められ、『中学も高校も全部やめた』と開き直っている状態。私が『どうするがいね?』ときくと、娘は、『いや! 中学行かん! 高校も行かん!』と言う。そしてこの時、わざと私に見えるように、自分が書いたノートの表紙を置いてあった。そこには、『今が最高だぜ! 青春真っ只中! 先のことなど考えない!』と書いてあった。そこで私が、『先のことなど考えない、今が最高だぜ、と書いてあるけど、お母さんも、今が楽しく、というの、ほんとにそう思うよ。でも、お母さんは、あなたの親だから、今も幸せ、将来も幸せ、になってほしいよ。今と将来は切れないで繋がっているやろ。今も楽しく、高校も行く、ってことは、できることだよ』と話すと、娘は黙って聞いていた。この話をしているとき、娘は、じーっと聞いていて、反抗しなかった。いつもは反論があると即座にそう言うか、あるいは席を立つとかという態度に表わす子なので、今回は聞いてくれたんでないかなあと母親としては思うけれど、本当はどうなんやろうね。」「娘にとっては、『今も楽しく、将来もどちらも楽しく』という発想は無かったみたいで、驚いたようだった。娘は『勉強する』と言ったとたんに、『今』は諦めて、苦しい生活をしなければならないと思い込んでいたみたいで・・・。」「それで、私は、現実の具体例をいろいろ出して、母親としては高校を出たほうが良いと思う理由を述べた後、『中学を出て、これからやりたいということがあるの? あったらお母さん、一生懸命応援するから。以前、メークアップアーティストになりたいと言っていたけど・・・』ときくと、娘は、『それはもうやめた』と答えた。翌朝、娘は、『今日から学校行くわ』と言って、朝から学校に出かけた。3日ほど休んでいたのだ

けれど・・・」という。Aはまた、夫とのかたを次のように語った。「先日、夫と喧嘩をした。夫の娘に対する愛は条件付の愛で、『娘にいつもいい子でいてほしい』というように思われる。夫は最近、『娘に腹が立つ』『だらくさい』『何がかわいそうや。同情の余地も無い』というのが口癖になっている。だから私は、夫にこう言って、思いのたけをぶつけた。『あなたのは、育ててきて裏切られた、自分の思い通りにならないから、だらくさい、やろ。腹が立つ、は、おりこうで真面目でいい子のC子（娘の名）なら可愛いけれど、そうでないなら受け入れられんということやろ。何にもC子のことを考えとらん・・・』と。そしたら、その次の朝、夫は『さ、愛する娘を起こしてくるかな』と言って、娘を起こしにいった。ちょっとは改善がみられたかなと思う。」そして、しみじみと、「娘は、親の言うことやすることを、本心かどうか、親の満足が見え隠れしているかどうかを鋭くキャッチしているように思う。私にもそんな部分がかなりあったろうな。そんなところを敏感に見抜いたのだと思う。でも、娘が外泊した時、母親が狂ったように慟哭したことは伝わったろうから・・・。年月のかかったことはそれだけの年月を必要とするというし・・・。これからじっくり娘とつきあっていこうと思う」と語った。さらに、ビデオ分析については、次のように語った。「自分は今まで気持ちにゆとりがなかった。ビデオ分析をしてから、『自分の本当の思いは何だろう』と考えるようになって、たとえば『そうだ、自分は相手に高校に行って欲しい。相手に、今も先も両方大事にしてほしい。また、今をやめさせたり我慢させたりする気はない』ということがはっきりして、落ち着いてそれを伝えようとすることができた。自分の会話が冷静になった。要らないことを言わないように心がけている。今まではことばが多かった。『じゃあ、何が言いたかったの?』と自分に問い掛けてみると、只の愚痴、やるせない、腹立ちを全部言っていたにすぎない。先日スーパーバイザーの先生が言われた『誰に対して言ったんですか?』『どれが通じましたか?』という

問いかけを自分でやってみると、今まで言っていたのは意味のない、只の『ほざき』だった。相手に通じたかどうかお構いなく、只言っていた。自分は只の『がみがみ母ちゃん』だった。ビデオ分析を受けたことはとてもよかった。これから娘に関わっていくときの手がかりが得られた。最近、『相手に伝えよう』として言葉を発する、そんな気持ち。」「今日、自分が母親役をしている第2回目のビデオを見て、すごくことばが多いとあらためて感じた。相手一言に自分は5行。自分の考えがまとまらないうちに口から出る。そして、話し出すとほとんど自己陶醉という状態! そういえば、私の母親も同じく説教型だった・・・。母は学校の先生をしていたからかもしれないけど。私も母親と同じことをしているんだわ・・・。」そして、ロールプレイングについては、「実際にロールプレイングで役割をとって演じてみて、実際にやってみた人でないとわからないかもしれないけれど、あそこでの発言は作り物の『演技』じゃなくて『本当』に言っているんだわ! やりながら、『こういう場所（ロールプレイングをしている状況）でも私のほんとに思っているのは、今、話をしているようなこんなことなんだな』と再認識したり、『ほんとの時（日常の生活場面）でも私はこう言うだろうな』と思ったりしていた。素の会話が自分自身の声の動きに入り混じっているのを感じた。ロールプレイングをしていて素直に気持ちが出て涙が出てくる場面もあった。だから、『ロールプレイングでのやりとりは、実際の娘とのやりとりとは違うから、それをビデオ分析しても意味がないのでは?』という疑問はあたらなと思う」と言う。そして、Aは、2つの円を半分ほど重ねた状態に並べて描き、「日常生活場面で娘に向き合うときの私は『どろどろの私』（重なっていない部分）だけでも、今では『この私』（重なっている部分）、つまり『相手の出方に左右されない本当の私』という存在がいるようになった。そうしたら、日常生活場面でも、『この私』を意識しながら話せるようになった」と語った。

4 X年6月第4週 親子関係診断テスト

Aから、日常細かなことはあっても以前とは取り組み方が変わり、娘も自分も安定しているので、今回で終結にしたいと申し出があった。そして、別の側面からも現在の親子関係をとらえてみたいと希望したので、田研式親子関係診断テストを施行した。その際、Aは自分から、「以前はこうだったのだけれど」と、過去の親子関係についても色違いの鉛筆で印をつけて示した。その結果を参考までに記す。ビデオ分析前後の各項目の得点をパーセンタイルに換算したものは、消極的拒否型が90%から87%へ、積極的拒否型が87%から83%へ、厳格型が90%から70%へ、期待型が90%から70%へ減少し、干渉型が77%から77%、不安型も80%から80%と変わらず、溺愛型が87%から100%へ、盲従型が70%から90%へ増加し、矛盾型が77%から73%へ、不一致型が87%から80%へ減少していた。なお、数値が高いほど危険度は低く、50～100%は安全地帯とされている。

Ⅲ 考 察

この章では、まず、事例の変化について、次に、ビデオ分析が相談活動において果たした役割について考察する。

事例の娘は、「小さい頃から手のかからない、『我が家の自慢の子』であった」という。これは、崎尾（1992）のいうように、「周囲の期待に添う」子、“言語的・非言語的に伝わるメタ・メッセージをよくとりこんで、回りがそうして欲しい、というような行動を率先してとる”子であったと考えられる。ところが、成長にともない、自分なりの判断で行動することが要請される思春期の年代に入ると、それまで言葉で自分を主張することに慣れていないために、“親の出すメタレベルでの指示にのらないことでしか、「自分」を守れなくなっていく”（崎尾、1992）ということが起きていたのではないかと推測され、娘は、今までの「いい子」に対するアンチテーゼとして、親や社会の期待に反するような様々な行動をとっていたのでは

ないかと考えられる。事例が夫について語ったときの、「いい子なら可愛いけれど」ということばが、その間の事情を裏付けているように思われる。また、ちょうど時期的に、それまで何かと家族の気がかりであった兄が就職して安定したことにより、家族の力動が変化したことも、娘がこの時期になって「いい子」をやめて自分を主張するようになった要因の一つとして働いた可能性があるだろう。現在の状況は、親にとっては困る事態であったが、娘にとっては、まずは両親の関心を自分に向けさせることに成功した、よい機会であったという捉え方が可能であり、相談の過程で事例もそのことに気がついた。次の段階としては、親子の間で、お互いに相手を尊重しつつ、十分な意見の交流と気持ちの交流がもたれることが望ましいと考えられた。幸い、母親である事例は、なんとかしてよいコミュニケーションを娘との間にもちたいという動機が強かった。今回、相談活動においてビデオ分析を行ったことによって、事例は、これまで自分が「相手に通じたかどうかお構いなしにただ言っていた」ことや、「相手一言に自分は5行」という不均衡な会話をしていたことや、「自分の考えがまとまらないうちに口から出る」状態であったことに気づき反省した。そして、「表情とか、声の調子とか、『間（ま）』にはすごく『思い』が出てるんやね」と、メタメッセージの重要性にも気がついた。また、「スーパーバイザーの先生が言われた問いかけを自分でやってみると・・・」という発言にみられるように、提供された新しい方略をさっそく自分に取り込むことも行っている。そのようにして、以前の「売り言葉に買い言葉」ではなく、娘の言ってくることをちゃんと「受け止めて」、自分の「本当に伝えたいことを落ち着いて伝えるようになった」「これから娘に関わっていくときの手がかりが得られた」という。また、夫や娘の行動にも変化がみられたことを述べている。このような事例の発言をみると、相談場面でビデオ分析を導入したことによって、事例は問題解決の糸口を掴んだのではないかと考えられる。

次にビデオ分析が相談活動において果たした役割について検討する。事例は、「自分を見ているもう一人の自分がいて・・・」と語っているが、これは、ビデオ分析を通して事例に佐藤のいう第三の眼、松村のいう三者的な視点が顕在化したことをうかがわせる発言である。これはまた、丸野(1989)や三宮(1995)のいうメタ認知の働きを示しているものと考えられる。丸野によると、“メタ認知という概念の中には、遂行過程、意識(化)、自己効力感、自己制御、反省的自己覚知、心的自己、心的主体という概念で表わされる概念が関係している”という。三宮は、“メタ認知が「認知についての知識」といった知識的側面と、「認知のプロセスや状態のモニタリングおよびコントロール」といった活動的側面とに大きく分かれる”ことを概説し、メタ認知を促すコミュニケーション演習の試みを紹介している。三宮によると、メタ認知能力を高めるためにはメタ認知的知識を豊富にすることがまず考えられるが、元来、メタ認知的知識は、ある程度自らの経験に裏打ちされていなければ定着しにくいと、知識の伝達だけでは不十分であるという。そこで、これを補う方法として、“対話・討論を活用することと、自分のスピーチ・プロトコルを作成すること”の2点を提案している。本事例でもビデオ録画を分析する際には、ビデオのトランスクリプトを作成し、スーパーバイザーSとの対話による分析を行っている。ビデオのトランスクリプトについては、作成に、録画の約十倍程度の時間がかかった。しかし、普段ならば意識されていない言葉使いや態度などを文字に定着させることによって客観的に見直すことができたことや、ビデオを何度も見直す過程で新たな気づきが得られたことなど、平田(1999)も述べているように、この作業の持つ意義は大きいことがこの事例から感じられた。また、Sとの対話の影響については、事例の、「先生が言われた問いかけを自分でやってみると、自分は・・・だった」という述懐に見られるように、「正解を探すのではなく、(中略)何が起きているかをはっきりさせましょう」という趣旨で行われたビ

デオ分析の際のSの質問が、事例にとって自分の思考を映し出す鏡のように働き、それが内化されて、日常生活の中でも、これまでになかった新しい視点として機能していることが、この発言から推測される。ビデオ分析におけるSという他者との対話もまた、事例のメタ認知を促進させたと考えられる。

さて、本事例では、上述のようなビデオ分析自体の効果に加え、分析の際に用いた語用論的な観点も、クライアントの認識と行動の変化において大きな役割を果たしていたように思われる。語用論的ビデオ分析をする際には、会話の伝達意図と効果、発話量や開始の主導権、視線、声の表情、間のとりかたなどの非言語にも焦点をあてて検討する。このことは、日常生活ではあまり意識されていない、コミュニケーションの「関係」の側面に焦点をあてること、そして、それに働きかけることを意味している。事例を例にとれば、それまでの会話の発話量の不均衡に気づきそれを改善しようと試みることや、発話の開始の主導権を自分が一方的にってしまうのではなく相手の言おうとすることを聞こうとすることや、自分や相手の「意図は何か」と省みることや、会話の崩壊を修復しようとする努力などは、同時に、そのような伝達行動の改善を通して、お互いの、対等な、より深いコミュニケーションを志向する営みでもある。本事例では、大井が、特殊教育の教員への介入で示した、伝達行動を操作することにより、行動問題も消失したことと同様な結果が、相談場面においても得られたと考えられる。これは、語用論では、言語理論は行為理論のひとつであり、言語は単に独立した意味体系をなすものではなく、人と人との間の交流を調整する働きをもつ意味体系である、とされていることと深く結びついているように思われる。

なお、本事例の分析場面は、実際の親子関係ではなく、ロールプレイングにおいてであった。事例の内省報告によれば、「あそこでの発言は『演技』でなくて『本当に』言っている。それも紛れもない自分なので、その場面のビデオ分析は、み

ずからの関わり方をモニターする上で役にたった」という。しかし、現実には、実際の親子関係とロールプレイングでの親子関係では、相手が異なっている。そのことによって、筆者が相手役を演じたロールプレイングでの親子関係と実際の親子関係では、どのような一致点と相違点があるかということが問題となる。また、従来から、カウンセリング研修においては、参加者の気付きの発展をもたらすために、しばしばロールプレイングが導入される。その理由は、“言語のみならず行為やものを媒介とした相互作用がなされることにより、ロールプレイング行為が言葉を越えた強いカタリシスと新しい環境認知にともなう気付きをもたらして自他の一層の理解を促す（島谷・台、1998）”からである。今回の事例の気付きには、ビデオ分析の効果に加えて、そのようなロールプレイングによる効果が影響している可能性があると思われる。それらの問題については、今後の検討課題としたい。

今回、クライアントとカウンセラーとの会話に対する語用論的ビデオ分析を相談活動に導入することにより、クライアントのメタ認知が促進され、母子関係が改善した。語用論的ビデオ分析の導入は、今後、カウンセリングにおける一つの方法として利用できる可能性があるものと考えられる。

文 献

- アレン・E・アイビー『マイクロカウンセリング』川島書店 福原真知子・相山喜代子・国分久子・楡木満生訳編 1985
- AUSTIN, J. *How to do things with words*, London Oxford 1962
- 平田聡『『ビデオ分析』を分析する：行動をビデオカメラで記録することの長所・短所・実際例』『霊長類研究』15 1999 pp. 199-206
- 『INREAL 研究』創刊号 INREAL 研究会 1987 p. 8
- 『INREAL program Overview 1978-1998』INREAL 1998
- 石田博幸「ビデオ分析を主とした大学の授業改善」『研究報告』5 メディア教育開発センター 1998 pp. 201-213
- 木原資裕・綿引勝美・坂本和文「テニス授業におけるストロークスキルの習得と学習方略に関する研究」『鳴門教育大学実技教育研究』11, 鳴門教育大学学校教育学部付属実技教育研究指導センター 2001 pp. 59-67
- 榊蔵千恵子「生徒のコミュニケーションにおける自発性を引き出すための教師の効果的なアプローチについて—INREAL 適用による実践分析—」『特殊教育学研究』29-4 1992 pp. 91-93
- 松村康平・板垣葉子『適応と変革』誠信書房 1960 pp. 15-16
- 丸野俊一「メタ認知研究の展望」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』34-1, 1989 pp. 1-25
- 村山正治「プロセスフィードバック法の開発」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』26-1 pp. 131-140
- 中島義明『映像の心理学 マルチメディアの基礎』サイエンス社 1996 pp. 114-115
- 小口忠彦『学習心理学の応用—学習指導の基礎—』日本放送出版協会 1988 p. 132
- 大井学「特殊教育の授業における教師—生徒の会話への語用論的アプローチ—実践的介入の試みとデータベースの作成—」『平成9・10年文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』1999
- ROGERS, C.R. *"This is Me" in On Becoming a Person*, Houghton Mifflin. 1961
- RUESCH, J. & BATESON, G. *Communication : The Social Matrix of Psychiatry*, New York : W.W. Norton & Company, Inc. 1951 pp. 179-181
- 坂越孝治・竹田契一・田中裕美子「保育者のコミュニケーション・センシティビティの向上に関する実践的研究 I—INREAL 適用の意義について—」『日本保育学会大会研究論文集』1987 pp. 718-719
- 崎尾英子『かよいあいたい心たち 親と子が築く基本ルール』言叢社 1992 pp. 169-170
- 佐藤悦子『夫婦療法—二者関係の心理と病理—』金剛出版 1999 p. 175
- SEARLE, J.R. *Speech Acts, an Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge University Press. 1969（「言語行為」坂本百大・土屋俊訳 勁草書房 1986）
- 三宮真智子「メタ認知を促すコミュニケーション演習の試み「討論編」—教育実習事前指導としての教育工学演習から—」『鳴門教育大学教育研究センター紀要』9 1995 pp. 53-61
- 島谷まき子・台利夫「カウンセリング研修への心理劇的ロールプレイングの集中的挿入の効果」『心理臨床学研究』16-5 1998 pp. 503-508
- 瀧川光治・加納章・多井新子・石垣恵美子「ニューメディアと保育4—ビデオ分析：「交代場面」「楽しさの共有場面」の分析」『聖和大学論集』27 1999 pp. 171-178
- 富田久枝・田上不二夫「幼稚園教員の援助スキル変容に

及ぼすビデオ自己評価の効果』『教育心理学研究』47-
1 1999 pp. 97-106

WATZRAWICK, P., BAVELAS, J.B., & JACKSON, D.D.

Pragmatics of Human Communication, New York :
W.W. Norton & Company, Inc. 1967 pp. 51-54